

<1987>

- 基本的人権としての自給農(有斐閣「書齋の窓」No.366“農”特集)

1987 (S62)

有斐閣 P.R誌

「書齋の窓」

NO. 366
(7.8月号併号)

「農」特集

△農△を通して見えてくるもの

基本的人権としての自給農

中井 俊作

私は三〇歳からの十年余をかけて(玄米菜食をベースにした)食物をほぼ自給自足できるようになりました。現在、妻と娘(四歳)との親子三人で毎月の食費予算は五千円、この内、塩、しょう油、食用油(半量は自給)、精米・精粉、種苗代などで約半分を占めますから他の食品の買物は月一、二、三千円といったところです。そんな生活(詳しくは日本有機農業研究会機関誌『土と健康』一九八五年八月号に「お金の掛からない私の暮らし」として記載したので省略します)を通して見えてきたことを書いてみます。

結論を先に記すと「農的生活(自給農)は“基本的人権”であって、民主主義の世にあっては人々の最小限の共通体験として位置付けたい」ということです。

ではまず実際にこの生活に踏み込んで見えてきた自分自身の姿、足元について列記してみましょ。

○(大卒まで出たというの) これまでまあ何と無知で無力でそのくせ競争心に引ずられて生きてきたことか、よく“平気”で過ごして来たものだった。実は都市に生まれ育った身の上として内心どこかで“えもいわれぬ不安”に付きまわっていたのですが、その不安の正体をつかんだ心地がしたので。

○“身勝手な口”そして“馴らされた食欲”に我ながら驚きあまれました。風土とか“匂”、加工過程あるいは誰が何処でどの様に汗して作ったものかわきまえることなく、ただ単に売ってある“食品”を買って食べ馴れて過ごしていたことに気付いたのです。

○初めて自分の排泄物(下肥)を汲んで野良に戻した時、あこれが紛れもない“生活”の匂いだ、と合点しました。そして“種をまき、育つ作物に手を添え、収穫し調理して口に入れ、残滓・下肥は堆肥に積んで田畑に返す”一連の循環の上に生活の礎がすわった時“安心”したので。これこそ“人心地”がついたという感覚でしょう。その人心地を得てようやく伴侶を迎え、親となる気持に至った私でした。

さて改めて自分の回りに目をやると

36

○周囲の農家は借金をして規模拡大をはかり、その労力負担を軽減するために更に機械や農薬、化学肥料を購入して一層経営を圧迫している。規模拡大をしているから作業は決して楽になった訳ではなく、農薬も体にそして生態系に良い訳がありません。

○機械や農薬の使用は“危険”なため誰もがこなせる作業でなくなり、年寄りや子供は“邪魔者”となる。これでは都市のサラリーマン家庭と大差ありません。

という次第で経験上次のことに思い当りました。

○(その気になって時間をかければ)誰にでもその人なりのやり方で自分の食物くらい自分で作ることができる。この地上に生を受けるということは自分の食物(親となれば家族の食物)くらいは賄う力量を天は等しく与えて下さっている。

○“自給農”は農薬・化学肥料を用いずとも対処できる。(この場合の農薬とは“化学的”農薬のことで我家では用いたことがありません。肥料類では消石灰のみ購入しています)

○自給農は家族総参加の“生活”(いわば「大草原の小さな家」の様な)を形作り、その役割分担の中で最も基本的な“社会性”を身に付けられる。(今日の世間でとり上げられがちな家庭内の問題は大方自己解消してしまうでしょう)

日を重ねるにつれそれまで頭の中でわかっていた心算のこ

とが身につまされてきました。

○日頃無意識の内に如何に多くの(他人の)分業の成果を平然と使っているか。自動車、家電製品からそれらを動かすエネルギー、そして木材・ガラス・紙に至るまで、いや有形無形のほう大な“知識”もそうなのです。ああ、身の回りのもので自分の“作った”ものなどこればかりは無し、そのほとんどはお金を仲立ちとして手に入れたものでした。今日の文明あらばこそその生活です。さばさりながらその文明の産物が必要不可欠のものが一体どれ程あるでしょう。

そこで改めて生活を見直しました。

○一層お金を使わぬように心掛けよう。自分の“生活”に必要の手立ては可能な限り自分の手に取戻そう。自分の作れぬ物は徹底的に大事に使おう。他人の労働の成果を大切にできない消費生活は生態系の破壊を促進するばかりです。利子などの不労所得も世を不要不急の品物で満たすのに拍車をかけます。使途を限定することにしました。安易に医者の手を煩わさぬよう医者の言葉に耳を傾けます。妻のお産も自宅で私が助産夫となってとりあげました。

さて周囲との関係です。

○私は二年前、はからずもこの町の農協青年部部長に

推されました。正直のところ大きな矛盾の狭間で悶々として
います。専業農家の跡とりである部員は「安心して打込める
農業」、「食える農業」を自指し励んでいます。しかし私には
今日の「農業」が逆に「農業者」を亡ぼすようにしか見えて
こないのです。食物を「商品化」したこと、食物を作る専門
家を育てそれを「業」としたことは根本的に大きな誤りを犯
している——そう考えると部員に聞く口は重くなります。若
しまぎれに出る言葉といえは、せめて「モノのわかった消費
者達と直接提携することだ。地方を落とさぬよう、生態系
の循環機能を損なわぬよう有機農業を実践することだ」という
程度……。

↑かくなる上は書き放題ノ。

○「土離れ」した文明がかつて地上で永続きしたためし
がありません。不耕食食の徒が世の中を悪くする、とは安藤昌
益も言いたかったことでしょう。実際に土の上で生活を始め
ると「悪いこと」をする暇も氣もなくなつてきます。多少の
不心得者がいたところでその所業はたかが知れています。如
何なる社会体制であろうと人が皆等しく自らの食物を自給自
足する程の体験を共有していたら大した過ちを犯すまい。い
くら建前が立派な世の中を作つても「土離れ」した人々の勝
手な振る舞いが幅をきかせるようになったら、その社会は危

険です。「特権階級」の存在が放擲されて、しかもその人々
が特権の上にアブラをかいたりその特権にしがみついたら社
会的不条理がまかり通るに決まっています。いくら民主主義
だといつても、わがままな人間が過半を占めたら一体どう対
処すれば良いでしょう。虚業栄えて実業衰え、自制力を失つ
た文明は破局を迎える。引金となるのは天災地災か局地紛争
か、それらを起因とする経済恐慌か。今日程の巨大エネル
ギーを平然と集中管理する社会では、ばかばかしい程単純な
人が機械のミスや異常かもしれません。いずれにしても「食
糧危機」にまで至れば致命的な環境破壊は避けられぬでしょ
う。

ああ、一体誰が「農」を職業になど位置付けたのだろ
う。どうして人はその不自然さを許してしまったのだろ
う。何故「自分の食物を自分で作る」という「基本的人権」を一

方で投げ出し他方では暮って平気でいられるのだから。「お
金」はかつて人々を身分から解放したかもしれない。しかし
お金に替え難い「生活」までをお金に換えてしまうことの不
自然さに氣付かないのは何故でしょうか。

○都市を否定する気はありません。都市は多数の農的生活
者の存立を保証する機能を發揮するところと考えるからで
す。人々の出会いの場でもあります。でも都市に住むには
「特殊で不自然な生活」を営む心構えがいるでしょう。住む
以上はその機能を果たす仕事に寝食を忘れて取り組めるぐら
いの心持が欲しいものです。そんな人は自分の仕事ができるこ
と自体に喜びを見出すでしょうから、都市に居ながら農的生
活者にわがままをいうような不心得は起こさぬことでは
う。

気の毒なのは子供達です。親が住み始めたばかりに都市

で生まれ育つなんて。親と子は「別」です。まず子供の「基
本的人権」を保証してから自分の将来の進路を考えさせるの
が順当というものです。基本的人権を棚に上げて都市で教育
を考へること自体、無謀というものではありませんか。

○まずはとりあえず自衛隊から食物の自給自足を始めたら
どうでしょう。同じ税金を用いるにしても年に何十万人もの
人が基本的人権を保証される機会を作れるのです。しかも手
当まで支給されて、都市住まいの年金生活者や子供達も農
山村に住むようになれば働き手も戻ります。過疎地は「人
里」に戻るでしょう。移れる親は子供と一緒に移り、子育て
が終つてから、また都市に出るのも良い。誰かが都市の仕事
をしなければならぬとすれば交替で出るのが無難です。その
ような仕組みを作りそのようなローテーションを可能とする生
涯学習を教育の基本とできるなら……。

○この現代の社会を踏まえ、その危険性を認知して「足る
ことを知る」社会へ歩み出したいものです。戦争や破局に至
ることを考えれば少々の自制は何のこともないでしょう。篠
原孝氏言うところの「農的小日本主義の勧め」にあやかるなら、
私はそれを支える「農的小日本生活」を勧めたい。でき
る人からできる所から、まずは都市の人達に「兼業化」をす
すめてみましょうか。この先の道行は今日までの文明の成果
を土台にしたればこそ実現できるはずのことどもです。

○昨今のように不見識に「工業の論理」を、工業の側から
歩み出すことなく「農」に向けて云々するのは、子が親に対
してわがままをぶつけているようなものです。「親を足蹴」
にする前に、自らが親になつた時の振る舞いを考へるのが当
然でしょう。親も親です、子供に泣き事と愚痴ばかり言つて
子の懐もできない。しかしこれ以上の「工業の過保護」はも
う「病」以外の何ものでもありません。朝食による病には
「断食」が最も有効な手だてと考へます。同じく朝食の時代
の社会的病理現象に対処するには「社会的断食」が最も無難
な治療法になるだろうと考へています。「自然治癒力」を引
き出す最良の方法でしょうから。

乱暴な書き方になりましたが、すべては不足質な「土離
れ」に起因すると思われてなりません。そこで初めに記した
結論を見た訳です。

なお、自給「農」は「基本的人権」だとして、土地の手当
と現金収入をどうはかるか？ 簡単に記すなら、土地につい
ては私有財産制度自体の抜本的再検討が迫られることになる
でしょうし、収入の方途に関しては終身雇用、終日拘束的な
現在の「職業」をパート化して、ローテーションを組むよう
な方法が適当と考へています。民主主義の世の中です。多数
の人が望むなら社会の在り方は調整できるでしょう。

(英業 熊本興五郎)

住所 863-2424 熊本県 天草市
五和町 手野 1-2646
(tel) 0969-34-0054 (Fax 兼)